



理事長挨拶

森 淑江

日本国際看護学会理事長
群馬大学名誉教授

新型コロナウイルスによる感染症（COVID-19）の発生からすでに2年以上経過し、依然として終息も収束も見込めません。この感染症は人と人との交流の形を大きく変えることになりました。感染を避けるためにオンラインによる仕事や会議、あるいは授業等が広く行われ、そのために、同僚とは画像を通じて会うだけであったり、同級生とほとんど対面で言葉を交わしたことがなく友人関係を築けないなどの負の側面がしばしば強調されます。一方職場から遠方に居住しての在宅勤務が可能になったり、自宅での講義の提供・受講により通勤や通学の時間がほぼ不要となるという利点も生みだしました。

日本国際看護学会では、2020年から学術集会がオンライン開催となり、本年の2022年も同様となります。国際看護の発展に寄与する活動を目指す本学会の学術集会には、海外在住の方が参加しやすくなるという大きな利点をもたらしています。

昨年は日本国際看護学会にとって、日本学術会議協力学術研究団体に指定されるという大きな飛躍の年となりました。この指定により日本国際看護学会誌に掲載される原著論文は、大学によっては博士論文として認められることになり、国際看護学の研



5年間Skypeを通じて2週間に1回研究指導していたペラデニヤ大学（スリランカ）看護教員が博士号を授与された時の写真です（2019年12月）。筆者はコロンボ大学から正式な指導教員と認められていました。これも国際看護活動の一つです。

究がさらに進むことが期待されます。

昨年の総会でご説明したように、今年はさらなる国際看護（学）の発展のために学会としての土台を強固なものにしようと、会員の皆様と十分な意見交換をしながら任意団体から一般社団法人への衣替えについての検討を行う所存です。会員お一人お一人のお力に本学会の、そして国際看護（学）の将来がかかっており、皆様の積極的なご協力と学会活動をお願い申し上げます。

シリーズ1

国際看護と私

国際看護に携わるきっかけやご経験、思いなどをご紹介します。

齋藤恵子

日本国際看護学会理事

埼玉県立大学保健医療福祉学部・看護学科

2022年度より埼玉県立大学看護学科4年次の必修科目として「グローバルヘルスと看護」がスタートする。看護学科必修としての内容を検討する中で「看護におけるやさしい日本語」のロールプレイを取り入れた演習を取り入れることを計画しました。

私が「やさしい日本語」と出会ったのは2020年10月に開催された第77回e医学教育セミナー：ワークショップ外国人患者とも「やさしい」でコミュニケーションに参加したことがきっかけでした。看護者が「やさしい日本語」を話すコツを理解し、使用することができれば多くの日本語を母国語としない人々とコミュニケーションがとれる。さらには高齢者や通訳を介して会話する時にも有用です。翌年2021年12月には科目運営と一緒に担当する看護学科の先生とともにアドバンスセミナーを受講しました。「やさしい日本語」研修を自施設で開催するための方法や課題を医療×「やさしい日本語」研究会の先生方やスピーカーの先生方に多くのアドバイスをいただきました。そして、ついに、模擬外国人患者をゲストスピーカーにお呼びする予算を大学

に申請し、獲得することができました。次年度いよいよ開講です。本学では初めての試みですので今からドキドキそしてワクワクします。

本学が位置する埼玉県は在留外国人数が神奈川県に次いで全国5番目に多く、約160か国及び地域と幅広く、国籍別では中国（台湾を除く）が最も多く、次いでベトナム、フィリピン、韓国、ブラジルとなっています。県内には在留外国人登録数が全国1位（法務省 出入国在留管理庁 「在留外国人統計2020年6月末」）の川口市があります。

次ページへ続く



国際看護と私

続き | 齋藤恵子_国際看護と私

私は母性看護学・助産学領域に所属しており、県内の助産学実習では外国人産婦さんの受け持ち実習をさせて頂くことも珍しくありません。「やさしい日本語」は分娩進行状態を判断するための陣痛の強さ、痛みの部位、肛門圧迫感、破水の有無や出血の有無などの観察・アセスメント場面において有用と考えます。そして側にやさしい日本語でコミュニケーションが取れる信頼できる助産師が傍にすることは安心してお産に臨むことができ、出産の満足度を高めることが推測されます。異文化背景を持つ女性たちは日本という異文化環境の中での妊娠、出産、育児期において、言葉が通じないために、孤独感や疎外感、不安感、危機感を抱いており、母国の文化的な信念によって、異文化間の葛藤やジレンマなどの困難を経験しています。今後は助産学領域の科目においても是非、取り入れていきたいと考えています。

私の国際看護との出会いは青年海外協力隊隊員です。看護師隊員として活動したラオスでは人々の暮らしに根差

した文化や習慣、価値や信念を理解することが難しく、悩みながらも「国際看護の魅力」を感じました。異文化環境の中で「個別性」を尊重した看護を学ぶ機会を得ました。帰国後は協力隊体活動で感じた「国際看護の魅力」に突き動かされるように、看護大学に社会人として入学し、助産師コースを選択しました。現在は看護師・助産師教育に携わっています。今後も学生とともに「国際看護の魅力」を探究していきたいと考えています。そして、私にとって国際看護学会は「国際看護の魅力」をより大きくしています。前身の国際看護研究会当時から日本の国際看護学発展のために尽くされてきた先生方・会員皆様に学ばせていただいております。今後も引き続きよろしくお願いいたします。



海外情勢 その1

今回は長引く新型コロナウイルス感染について、海外に滞在する方々に現地の様子をご報告いただきました。

セネガル共和国における新型コロナウイルスを巡る動向

日達(内田) 真美

世界食糧計画セネガル事務所 国連ボランティア

セネガル共和国はアフリカ大陸最西端に位置する国です。アフリカ諸国の中では発展が進んだ国で、2035年までに新興国入りを目指しています。人口は約1700万人で、国民のおよそ半数が農村部で生活をしています(World Bank Open Data)。国土面積は日本の本州ほどですが、北部はサハラ砂漠の南端にあたる乾燥気候である一方で、南部は緑豊かな熱帯気候に分類され、多様な自然環境を持つ国です。



写真1：海岸沿いの魚市場

昨今の新型コロナウイルスのパンデミックは、他国と同様セネガルの人々の生活に直接的かつ間接的に大きな影

響を与えています。セネガルでは2020年3月2日に最初の陽性者が報告されて以来、2021年7月に1日当たりの新規感染者数は第三波のピークを迎え、6,199人の感染者が報告されました。さらに、2021年の年末からは第4波も迎えましたが、2022年1月10日に3,287人の新規感染者数のピークを迎えて以来、2022年1月末現在はずでに収束の様子を見せています(WHO coronavirus Dashboard)。第4波に関して注目すべき点は、先進諸国と同様に1日当たりの新規感染者数の急増は見られたものの、そのピークは前回の約半数で収まったという点です。この理由は明らかではありませんが、昨年12月初頭に確認されたオミクロン株の拡大に伴い、軽症者や無症状者の検査数自体が減った可能性も十分に考えられます。セネガルの人々との会話では、未だコロナウィルスの存在さえ信じていない人も多くいます。標準的な暮らしを送る大半のセネガルの人々にとっては、新型コロナ様の症状を呈したとしても、その検査は高額で受けることは難しいように感じます。

海外情勢 その1

日達（内田）真美

世界食糧計画セネガル事務所 国連ボランティア

略歴：：保健師。ニジェール・ガボンにて2010年から2012年まで青年海外協力隊(感染症対策)として活動。2013年から2016年まで東京都あきる野市において保健師として勤務。現在は国連ボランティアとして世界食糧計画セネガル事務所で栄養プロジェクトに従事。

続き | 日達(内田) 真美_セネガル共和国における新型コロナウイルスを巡る動向

セネガル政府は新型コロナ対策として、これまで国境封鎖や、ロックダウンを実施しました。迅速な対応によりアフリカ諸国の中でもコロナ対策に比較的成功した国として考えられています。しかし、補償を伴わない対策は国民にとっては大変苦しいものでした。また、セネガルは観光業も重要な産業の一つですが、観光客は激減し、観光地の様子も変化したようです。セネガルの主要宗教はイスラム教であり、一時はモスクの閉鎖措置も取られましたが、現在は多くの人々が恒例の金曜日のお祈りをモスクで行っています。さらに、全ての地域でのマスクが義務付けられ、感染の第3波時にはローカルバスやタクシー利用者の多くがマスクを使用していましたが、現在はほとんどマスクの着用がされていません。一方で外国人が利用するようなスーパーなどではマスクの着用がない場合は入店を拒否されることがあります。マスク

が必要となる場所の周辺では、携帯電話のプリペードカードと共にマスクを販売する人々も見られ、セネガルの人たちの生きるための柔軟性と力強さを感じます。

未だ今後の見通し立たず苦しい日々ですが、セネガルの人々が少しでも安定した暮らしが送れるよう、微力ではありますが尽力していきたいと思います。



写真2：路上でのマスク販売
(黄色いプリペードカードを指に挟み、手には個別販売用のマスクを持つ)

シリーズ2 海外情勢 その2

シンガポールの感染症対策 ～生活者の目線から～

藤井まい

アジア欧州財団（Asia-Europe Foundation, ASEF）

2021年よりアジア、ヨーロッパ諸国を対象に、医療物資支援を行う新型コロナウイルス感染症対策事業に従事するためシンガポールで働いている。コロナ禍で世界各国が様々な政策を模索し、市民の生活や行動様式も2年前とは一変した。本稿ではシンガポールについて、一市民の目線からコロナ対策の様々な取り組みや施策等を紹介する。

シンガポールは東京23区より若干大きい土地に約590万人が暮らす島嶼国である。人口密度は東京の約半分、隣国マレーシアとは2本の橋で繋がっている。日本より若年層が多く労働者数の3割強が外国人労働者という構成で、コロナ禍前はおおよそ140万人の外国人労働者が国内に居住、或いはマレーシアからの越境通勤で働いていた。COVID19の蔓延でこの2国を繋ぐ橋も封鎖され自国への帰国者も多かったことから、シンガポール国内は労働力不足が社会問題となった（陸路国境は現在2年ぶりに再開）。

コロナ対策も様々な変遷を経て現在に至る。2021年上旬頃は封じ込め作戦として、水際対策やPCR検査が徹底して行われた。市民生活も、出

勤可能な人数の割合、飲食店の出入りや会食人数制限等を具体的な数値で示したうえで罰則付きで設けていたため、遵守率は高かったように思う。マスク不着用は2万円以上の罰金が科せられていた。驚いたのは、町のパトロールをロボットが行っていたことである。ロボットといっても人間型でなく、乗り物のように見えるのだが、シンガポールでは建物内も掃除ロボが活躍し、地下鉄の車両もAIの自動運転だったりする。この未来型思考の街づくりはコロナ禍でも生かされているようだった。

[次ページへ続く](#)



写真1：ショッピングモール内を巡回する掃除ロボットの写真

海外情勢 その2

藤井まい

アジア欧州財団（Asia-Europe Foundation, ASEF）

略歴：保健師。マレーシアや日本の大学勤務を経て2007年から2014年までWHO（世界保健機関）勤務。2015年よりJICA専門家としてラオスやスーダンで勤務。現在はシンガポールで国際協力事業（ODA）に従事。

続き | 藤井まい_シンガポールの感染症対策 ～生活者の目線から～

既に高い予防接種率を達成しているシンガポールであるが、序盤から力を入れていたもう一つの対策は「追跡」である。市民は建物に入る際にQRコードを読み込み、携帯やそれに代わる電子機器で位置情報を提供する形になり、また本人にも陽性者と知らずに接触していた場合でも後日通知がくる形になっていた。2021年後半からは、COVID19の封じ込めから共存への模索が始まった。その一つは、出勤時の抗原定性検査の義務付けである。検査キットで自己検査を行い陰性であれば出勤できるとしたため、町角に登場した検査キットの自動販売機には列ができていたこともあった。

最後に、シンガポール政府の関連財団からは多くの物資がシンガポールに在住する全ての人に支給されてきた。物品はバリエーションがあり最新の物を届けるスタイルで概ね市民からの評価も高かったように思う。

最新の配布物品は、2022年1月で再利用可能な最新型マスク（マスクピュアAIR+マスク）で、これを自動販売機で受け取ることができる。身分証明書を機械に打ち込むかQRコードをスキャンするというこれまたハイテクな手法での配布である（もちろん、公民館的な場所で受け取る手法も併設されている）。これまでも、アルコール不使用の消毒液（シンガポールはアルコールを摂取しないイスラム教人口も相当数いるためと思

われる）、N95マスク、サージカルマスク、パルスオキシメーター、使い捨てマスクとマウススプレー、ポビドンヨードのうがい薬、抗原検査キットが配布された。

このような物資の全在住者への配布による感染者減少への効果を検証するには時間がかかると思われるが、少なくとも物資配布は受領側には直接的かつ大きな心理的インパクトがある。世界最新のグッズを無料で受け取れて、政府もやるだけのことをやっているという印象になる。多少感染者が増えていっても、社会的、経済活動は進めていくのだという方向性を感じることができるといえる。今後も世界的な蔓延概況を鑑みながらシンガポールは先進的な方策を検討し続けるのだろう。

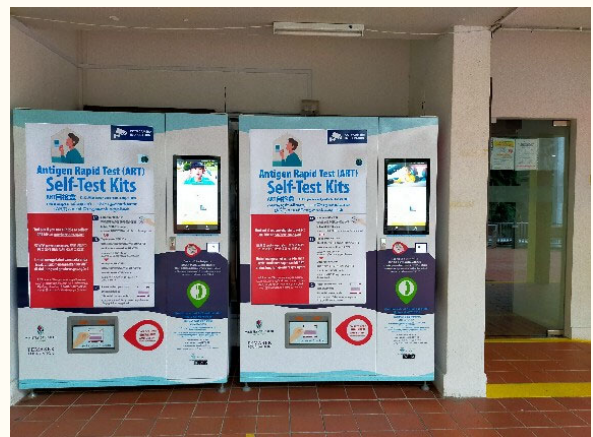


写真2：検査キットの自動販売機の写真

第5回学術集会報告 1

2021年9月4日(土)第5回学術集会がオンライン開催されました。学術集会会長を始め運営に関わった方々にご報告頂きます。

学術集会会長報告

近藤暁子

日本国際看護学会第5回学術集会会長
東京医科歯科大学大学院

多くの方々のご協力により、前年度の続きオンライン開催となりました日本国際看護学会第5回学術集会を無事開催することができました。参加者は137名で、会場で実施された過去の学会とほぼ同人数の方に参加していただくことができました。オンライン開催も2年目となり、参加者も主催者もだいぶ慣れてきたようでした。参加者からの感想で「外国人のシンポジウムや司会進行、英語発表など、国際らしい感じが出ていた」という感想をいただきました。

基調講演は「コロナ禍における研究および教育について」ということで、ワシントン大学の新津晃右講師とともに進めている共同講義や共同研究を紹介させていただきました。私の大学でも2020年以降海外研修が実施できていませんが、その代わり

にオンラインによる交流プログラムを実施し、学生は海外の学生との交流を楽しんでおります。ZOOMという便利なツールのお陰で、逆に普段交流できないような人々とも交流することができました。さらに、オンライン調査法の普及で安価に国際比較研究を実施することができるようになりました。

シンポジウム1では「マレーシア・タイ・アメリカにおけるCOVID-19の現状と看護教育への影響」ということで、3か国の先生のお話をライブでお聞きすることができました。活発な質疑応答があり、もう少し時間を取っておくべきであったと反省しました。

次ページへ続く

日本国際看護学会 第5回学術集会

レジリエンス！
with/after
コロナにおける多文化共生
Web開催

2021年9月4日(土)

オンデマンド配信は終了しました
配信期間
2021年9月7日(火)～9月21日(火)



第5回学術集会報告1

続き | 近藤暁子_学術集会会長報告

シンポジウム2では「看護基礎教育で考える大規模災害時の在日外国人支援」ということで、実際災害時の外国人支援を行われている方々のお話を伺うことができました。

教育公演「SDGs～コロナと共に生きる新しい生活～」では感染管理認定看護師の松永早苗先生に実用的な感染予防に関する方法をととても分かりやすく教えていただきました。

研究委員会企画「やってみよう！オンラインを活用して広げる研究活動」では桑野紀子先生にオンラインで調査する研究手法についてご教授いただきました。

看護師のための英語ワークショップ「English for Japanese Nurses - by English for Nurses」では英語がネイティブではない看護師に対する看護英語を教えて下さっている、ドイツ出身でイギリス在住のSabine Torgle先生が楽しく英語を学ぶ機会を提供してくださいました。今後もこのような機会が増えて無理なく英語が学べると良いと思います。

交流会「医療現場の多文化共生 外国人看護師と一緒に働く」は東京医科歯科大学大学院の留学生が外国人看護師としての日本での体験を話してもらいました。華セイさんは中国からの留学生ですが、日本語でうまく司会を務めて下さいました。詳細

は華さんの報告書をご覧ください。

一般演題は18件あり、海外から発表してくださる参加者もいました。そのうち英語での発表が3件あり、今後さらに英語での発表が増えることを期待します。2020年以降新型コロナウイルスの流行のため、国際看護を主な仕事としている私たちにとってかなり活動の制約があり、予定変更が余儀なくされたことがたくさんありました。しかし、その中でできることを模索し、普段と同様、またはそれ以上の活動を皆さんが行われていたこと本学会で明らかになり、お互い学びあうことができました。

本学術集会のテーマを決めたころはafterコロナも想定していたのですが、未だ感染が収まる気配がなく、第6回学術集会もオンライン開催がベースになるとお聞きしています。感染状況が落ち着き、1日も早く会場で皆さんと交流できる日が来るのを楽しみにしています。



第5回学術集会報告 2

日本国際看護学会第5回学術集会を終えて

宮本 圭

第5回学術集会企画・実行委員

順天堂大学医療看護学部

去る2021年9月4日、日本国際看護学会第5回学術集会は、テーマ「レジリエンス！with/afterコロナにおける多文化共生」のもと開催され、会員・非会員を合わせ、総勢137名の参加者を得て、成功裏に終わった。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

第5回学術集会の特徴は、第一に2年連続でのWeb開催となったこと、そして第二に、アメリカ・タイ・マレーシアといった国々からの多彩な講師陣を招聘したこと、第三には、参加型の「看護師のための英語ワークショップ」にあったように思う。また、東京医科歯科大学院生による外国人看護師の交流会も興味深い企画で、充実した学術集会だった。

他方、集会後のアンケートから学術集会を振り返ると課題も見えてきた。演題発表が少なかった点、一日という限られた時間の中で二つのRoomでの開催となり全プログラムへの参加が叶わなかった点、昼休みにも企画が続き一息つく暇がなかった点、オンラインの特性から質疑応答が活発になりにくかった点等、あげられる。こうした課題を踏まえつつ、今後も多様なプログラムと共に、経験や学びを共有する場として学術集会が続いていくことを期待している。

新型コロナウイルス感染症の流行

がいつ収束するのか、まだ先は見えない。しかしながら、学術集会でみなさまと再会することを思い描きながら、グローバルヘルス/ナースングに関わる一人として研究活動や現場での実践に挑戦していきたい。

日本国際看護学会 第5回学術集会

レジリエンス！
with/after
コロナにおける多文化共生
Web開催



第5回学術集会報告 3



医療現場での多文化共生—外国人看護師と一緒に働く

華 靖 (カ セイ)

第5回学術集会企画・実行委員

東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科・国際看護開発学分野

私は中国出身の留学生で、大学院の3年生です。研究テーマは在日外国人看護師の職務満足度、職場での差別、離職意向の関連に関する研究です。そこで、本学術集会において、「医療現場での多文化共生—外国人看護師と一緒に働く」をテーマに交流会を開催させていただきました。

今回の交流会では中国とモンゴル出身の看護師の方に日本の臨床現場での活躍経験について発表をしていただきました。2人とも東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科国際看護開発学分野の院生で、日本の国家試験を取得して日本で看護師として勤務経験があります。王聡聡さんは中国出身の看護師で五年間日本で看護師として働いた経験を、ガンチュルーン・サンブーさんは、日本の専門学校で学んだあと三年間の勤務を振り返ってお話いただきました。具体的内容は、来日の経緯や現場での活動の内容、日本人の同僚との交流、日本で看護師をするメリットやデメリット、現場で直面していた困難と克服するための努力まで、幅広い内容を話していただきました。その中で、日本と母国での看護の違いについても着目し、「日本は言葉がなくても空気を読むことで交流できる」、

「職場での人間関係」など具体例を用いながら、話していただきました。

意見交換では、日本への適応に応じたサポートの改善内容が示唆されました。共生関係を築くために、文化的な違いについて近い同僚から雇用組織まで理解を広げることにより、職場でお互い理解に推進していく重要性が示唆されました。また、それぞれの「看護観」を発表していただき、日本の「看護観」との違いを明確にすることへの取り組みや研究課題が示唆されました。日本の臨床現場で外国人看護師の役割・重要性を示しながら、外国人看護師が適応できるような援助内容の検討、環境作りを推進する必要があります。国際看護学での国際人材の働く姿や現状を一層認識した交流会でした。

いろいろな文化的背景を持つ患者について柔軟に対応できる看護人材が求められています。将来に向けて国際的な看護を提供するために、看護分野においても外国人の雇用は人材確保対策の一つです。そのような海外の看護人材が日本に来る時代に即応していくには、ともに学び、ともに交流、相応の準備が欠かせません。今こそ、日本で「医療現場での多文化共生」が求められている時代ではないでしょうか。

第5回学術集会報告 4



国際看護と私——学術集会参加記

応 哲希 (オウ テツキ)

第5回学術集会企画・実行委員

東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科・国際看護開発学分野

私は2019年10月、日本の進んだ保健医療体制に憧れて、日本に留学して来ました。その後、母国の中国で新型コロナウイルス感染症が発見され、まもなく世界的大流行に発展してしまいました。当時、私は語学学校で日本語を勉強していましたが、米国で中国人の患者は診療所に受け入れられないというニュースを聞き、心を痛めていました。その時、初めて国際看護という分野を知りました。国籍、人種、文化などのあらゆる差異を超えて、公正な医療が提供できる未来を作る必要性を痛感しました。

コロナは未だ猛威を振るっており、大学の同窓や前の同僚たちが毎日最前線でコロナと戦っている中で、私は国際看護学研究に携わることを決めました。

今回、初めて企画・実行委員として日本の学会に参加しました。十分な役割を果たしているか疑問を持ちながら、英語のスライドの翻訳とアナウンスを担当させていただきました。貴重な機会を与えていただき、新たな知見と体験を得ました。ここでは、基調講演とシンポジウム1について述べたいと思います。

まず「コロナ禍における研究および教育について」をテーマにした基調講演で、近藤暁子先生とワシントン大学の新津晃右先生は行っている

共同講義 Collaborative Online International Learning (COIL) と共同研究を紹介させていただきました。私は去年のCOILに参加しました。PadletとZoomを通じて、お互いに自国の独特の宗教観やストレス対処法を話し合いました。英語力の向上のみならず、異文化間の相互理解を深める機会になりました。

次に、シンポジウム1では、マレーシア・タイ・アメリカの看護教員は自分の国におけるCOVID-19の現状と看護教育への影響を紹介させていただきました。新たな変異株による感染が拡大している中、世界における看護師は COVID-19 感染症患者の対応に追われています。コロナにおける看護教育は世界中の国々が抱える喫緊の課題になっていると認識しました。

このほか、日本国際看護学会第5回学術集会は、英語ワークショップや交流会、そして一般演題など、質量ともに豊富なプログラムを準備いただきました。本学術集会での学びを活かして、今後自分の研究成果を生み出すように努力し続けたいと思います。

学会活動紹介

学会活動を知って頂くために本号からの新企画です。今回は、研究委員会からのご紹介です。

日本国際看護学会会員グループトーク Research「わ」

松永早苗

日本国際看護学会研究委員

神奈川県立保健福祉大学実践教育センター

日本国際看護学会は、1996年3月23日に設立された国際看護研究会から2017年4月1日に日本国際看護学会として発足しました。日本国際看護学会の会員は、臨床現場の看護職、教育者、研究者と様々です。学会員は、「国際看護」に興味を抱き、国際看護学をさらに発展させるために、日々の実践、教育、研究に邁進しています。

日本国際看護学研究委員会は、会員からの“研究ってやりたいけど、時間がない”“一人で研究をやっていると、研究の方法が良くわからない”“研究や他の情報を語り合う場が欲しい”という声を受けて、日本国際看護学会員同士が気軽に語り合う場として、結YUI会員ページのグループトーク Research「わ」を開設しました。また、会員ページ以外に、初めてオン

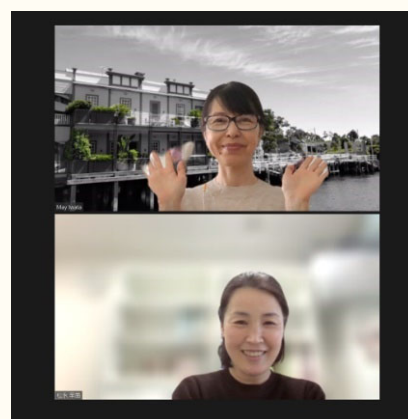
ライン会議システムを使用して情報交換をしました。初めてのオンライングループトークは、参加者2名となりましたが、オーストラリアと日本の新型コロナウイルス感染症の状況や対策、看護、文化の違い、今後の国際看護の方向性などを語り合い、楽しい時間となりました。

皆様も、研究に関する疑問や仲間の「わ」を広げるために、Research「わ」で語り合いませんか。参加を希望する会員は、氏名、会員番号、メールアドレス、参加を希望する理由を記載の上、下記の連絡先にご連絡ください。多くの方の参加をお待ちしております。

連絡先：日本国際看護学会研究委員会
research@jsin.jp



Research「わ」の募集ポスター



写真：初オンライン
Research「わ」の様子。
下段が筆者

お知らせ

第6回学術集会のご案内

日 程：2022年9月18日（日）

オンライン開催

演題登録期間，参加登録期間，プログラムの詳細は，
後日，学術集会ホームページでご案内します。

<https://2022jsininfo.wixsite.com/jsin>

学術集会長 河原宣子（京都橘大学）

準備委員会 松永早苗，大植崇，竹下夏美
（事務局）マルティネス真喜子，穴吹浩子，石川ちさと

学術集会事務局連絡先 2022jsin@gmail.com

テーマ
「広めよう！国際看護
ティーチングメソッド」

皆さんは，国際看護の授業や研修をどのように実施されているでしょうか？教育・臨地現場問わず，学習内容や方法について多種多様な工夫をしておられると推察します。一方で，どのように展開すればよいか迷っておられる養成機関や施設もあるのではないのでしょうか。

第6回学術集会では，全国津々浦々，国際看護教育に関する多くの事例や方法論を共有していきたいと思います。大切なのは，国際看護のコアは何だろう？という問いに向き合うことであると信じます。





編集後記

新型コロナウイルス感染症は、まだ世界中に大きな影響を及ぼしています。本号では海外で国際協力活動に携わる方々から、コロナ禍における滞在国の様子についてご紹介いただきました。また新企画：学会活動紹介として研究委員会の活動をご紹介いただきました。

広報委員一同、NEWS LETTERを充実させていきたいと思っています。皆様からも、「こんな学会活動を紹介したい」、「こんな国際看護学の一面を伝えたい」などのご意見、さらなるアイデアをお待ちしております。

碓井 瑠衣（日本国際看護学会 広報委員）